

用ノ音ヲ取テ 漢吳ノ両音ヲ常用キル字 仮字ヲ定ムベシ  
アラバ両音ヲ用キルベシ

仮令バ東ハトウヲ取テツウヲ省キ中ハツウトウヲ共ニ  
省キテ中略和音ノチウヲ取り公ハコウヲ取テクウヲ省キ  
木ハボクモク共ニ普通トセバボクモク並ニ取ルガ如クシ  
テハイカゞ 又恐ハキヨウヲ取テキユウヲ省キ松ハシヨ  
ウヲ取テシユウヲ省キ宗ハソウシユウヲ取テシヨウスウ  
ヲ省クガ如クシテハイカゞ

又神ハシヌジヌ並ニシンジントシ民ハビヌミニヲ一ツニ  
シテミントシ金ハキムコム並ニキンコントシ心ハソムヲ  
省キテシムヲ取リテ之ヲシントセバ頗ル便利ナラン 此  
ノ舌内声唇内声ノヌニムノ韻ハ総ベテントシテ妨無カル  
ベシ其ノ故ハンハ喉舌唇ノ三内ニ通ズル字ナレバナリ  
御下問ノ条々ニ対シテ愚意ヲ述ブルコト此ノ如シ  
明治廿七年六月十六日

黒川真頼

#### (四) 字音仮字づかひに就いて井上文部大臣の

問に答へ併せて愚案を述べ

我國の仮字は一字にて一音を現はす故に彼の印度の悉曇歐洲の「アルハベット」の如くに連声法を学び綴字法を講習する必要なければ普通教育の上には至極便利なり されど少しく進

んで言語の成立音韻の転化等を講習するには不便を感ずることあり 其は如何といふに今日の國語は漢語を交ふること多きが故に屢々父音を現はす必要あればなり たとへば國家といふ詞を仮字にて書くにはコクカ或はコツカと書くより外に仕方なし 普通にはコツカと書けとこは正しき仮字にあらず 國家は羅馬字にて書けば *Rōka* (コクカ) なれば寧ろコツカと書くを適當とす 然るにこの場合にて小く書きたるクが如何なる音を現はすかまたコツカとツを用ひて之を現はすと如何なる差別あるか ことは少しく音韻の學に通じ羅馬字の如き文字を知るものならではその別を知ること難からん この類の詞は普通の言語文章に頗る多し 鉄砲骨董相等の如き字音の詞を精密に書き現はし或は言語の成立音韻の転化を説明する時などには仮字にては不充分にして羅馬字の必要を感ずること屢々なり されとこれらのことは概ね皆な學説上に屬することにして實際應用の上にはいさゝか不便を感ぜざるのみならず彼のむづかしき連声法綴字法を学ぶに非れば使用する利極めて大なり

第一問に答ふ 教育の上にて字音の詞を仮字にて書くはその易きが為なり 然るに様、要、容、葉等の如き字音の詞をヤウエウヨウエフと仮字にて書き分けんには先づ其の本字の正しき音と意義とを詳かにせざるべからず ことは頗る煩はしく

して寧ろ其本字を用ふるを便とす。かくては教育上仮字を用ふる原則にも背くものなり。されとその困難を冒し煩はしきを忍び実用上の便不便をも顧みずして字音の仮字つかひを正しくする所以は言語学上詞の歴史を知り字音の変遷を考ふるに必要なればなり。相といふ字音を今は宰相といふ場合にはシヤウ人相といふ場合にはソウと発音すれども相模相樂等の如き地名の場合には之をサガと読ませたり。之に因りていしへ相字の音には<sup>ソウ</sup>の響きありしことを知るべきなり。支那の言に<sup>ソウ</sup>と鼻音のつまるものは大抵我が国音にては通例ウとのみなれるが相をサガと読ませたるなどは明かに<sup>ソウ</sup>のウとなりたることを証拠立つるものなり。

次に要字の今の支那音はヤウ(委しく云へばヤオと書くべきか)にてエウにはあらず音博士の古伝も強ちに信じ難しとの御説はおのれもしか思ふなり。然れども我が国にて古来要字の仮字をエウと書き来れるは当時の人の聞き誤り或は言ひ誤りを伝へたるか或は他に原因あるかこれも音韻の転化などを考究する上にてその源を探るは面白き業なり。今の支那音に違へばとて強ちに棄つべきにもあらざらん。何となれば疑はしきところは更に研究すべきところなればなり。

第二問に答ふ。蝶をテフと書き法をハフと書くを仮字つかひの法とするならば何故にチヨウ、ホウとは読むか。我国にはもと入声なし故にテフ、ハフの音あることなし云々。おのれ

思ふにテフ、ハフをチヨウ、ホウと今日読むは音韻の転化にして大和詞の中にもかかる類あり。また我が国にもと入声のなかりしは事実なれども漢字伝来の後留学生などの派遣せられし頃にはこの入声もありたりしが如し。そも、大和詞は孰も母音にて終る故にいしへ入声のなかりしは明らかかなり。されども上代の人が入声を発音し得ざりしにはあらざるべし。初め留学生などを支那に送りて正則の漢文学を修めしめたりし頃には音博士などもありたれば能く入声の音をも発音したりしならんと思はる。そは今日洋語を正則に学びたるものは大抵その所修の洋語を正しく発音し得るが如くなればなり。またタユタフといふ国語を現はすに絶塔を用ひ爾布といふ地名を現はすに入野を充てたるが如きいにしへ入声をも正しく発音せし証として頼るべきなり。さてテフ、ハフをチヨウ、ホウと発音するは、恋ひ思ひ戦ひなどを恋ひ思ひ戦いと発音し恋ふ思ふ戦ふを恋う思う戦うと発音するにひとしくこは音韻の転化にして怪しむに足らざるなり。

我国語になき音は苦んで之を発音せずなるべくわか国音の近きものに直して行はんとするは新らしき外国語を自国語に同化さする一法として考ふべし。既に久しく国内に行はれて殆ど国語となりたる外来語の発音をも改めて純粹の国語風に直さんとするは無用の骨折ならん。しかず普通教育上並に実用上に弘く行はるべき仮字書きの方法を定めんにはその方法に

就いての愚案は最後に之を述べんとす

第三問に答ふ 字音の詞を和文の間に交ふるには其の音を柔らめ音便の仮字にて現はすこと古来の通例なりとす たとへば法事ハツクをホウジとかくが如し これぞ今日普通教育の上に応用すべき最簡便の良法ならん

さて近世の字音仮字づかひの説は古来字音の詞を仮字書きにしたる例と違へるはこれ近來字音仮字づかひをも純粹なる大和詞の仮字づかひと共に正しくせんとするに因るならん 古人は実用を主として音便の仮字を用ひ近來は學問の進歩したる結果として學理上より字音の仮字をも正しくせんとするなり おのれは學問上には正しき仮字づかひを存し日用には音便の仮字を用ふるを便なりと思ふ

次にチヨウ、テウ、テフ、シヨウ、セウ、セフの類よりキとクキ、ケとクエとの別などを書き分つことは非常に困難なれどもこは前にも述べたるが如く全く専門學者のする業なればその難易の如きは問ふところに非ず 偏へにその精密ならんことを望むべきなり 随てトウ(東)のウとヤウ(要)のウとは其の原音を異にすれば之が區別を正しくして東はトウと書き要はヤオと書くべし 苟も漢字音を正さんするからには出来るだけ委しく正さざるべからず また之を正しくせんには單に仮字書きにする時のみならず之を發音する時も書く時と同様の區別を為さるべからず 即ち漢文講読の際には正しく

發音せざるべからず 然れどもこは独り今日の字音學者にのみ為さしむべし 教育上に應用せんことは到底望むべからず もし幾ばくの困難を侵しても字音仮字づかひを正しくせんとならばおのれは寧ろ今日の支那音を教へて漢字を直讀せしむるを便なりと考ふ これ今日非常の困難を凌いで漢字の發音を正しその仮字を正すとも語學上字音の変遷に關して多少の利益を得るより外に實用上には其の勞を償ふほどの利益あることなければなり 然るに今日の支那音を學ぶときは學問としては漢文學の真味特に詩賦等の妙味を感得しまた應用上には支那人と對話し或は白文を容易に讀み得るに至るべくまた仮字づかひの如きはおのづから正しくすることを得るなり その効あに大ならずや 而して漢文學教授の上にかくの如き改良を為すには教師の不足なるよりして到底行はれ難しといふものあるべけれど實効の少き字音仮字づかひを正しくせんとする程なれば敢へて難しとはいふべからざるなり 現在の有様の如く漢字を多く讀み書きする漢學者はその字音のことに注意せずして之を扱ふことの割合に少き一種の國學者のみその音のことに注意するやうにては教育上その流行を望むことの無理なる木に縁りて魚を求むるが如しとやいふべからん 故にひろく之を行はんとならは天下の漢學者をして先づその發音を正しくせしめざるべからず 然せんには今日彼れらに新らしく支那音を教へて習熟せしむるとその勞力難易の

点に就いては大差なかるべし。これおのれは寧ろ支那音を教ふるを便なりといひし所以なり。

ンとムとの別はいにしへ我が国にて漢文学を正則に修めたりし頃には確かに存在せしなり。今日その証跡として観るべきは印南をイナミ今遺金コムをイマカヘリコム信濃をシナノ乱今可聞をミダレコムカモ難波をナニハに宛てたる類を觀て知るべし。されど大和詞には父音を重ぬることなくまた之を現はす仮字もなければmにて終る支那音を書きあらはすには仮字の中に最もその音の相近きむ即ちmuを用ひnにて終る支那音を現はすにはひとしくぬ即ちnuを用ひたるなり。前に挙げたる例に因りて考ふればたとひ古人はmとnとを正しく発音せざりしにもせよ、正しく発音せしにもせよ正しく之を用ひたりしなり。今日は支那にてもこのmとnとを區別せずとのこと事実ならんには思ふにmとnとは発音上極めて相類似せるを以て古は之を區別したりしも今日となりて區別せざるやうになりたるならん。発音の変遷はいつれの国にもあることにてmとnとの別のなくなりたるが如きはさもあるべく思はるることなり。

さて今日我が国にて字音仮字づかひの上にmとnとの別をなすは少くとも我国の地名などに用ひたる漢字とその讀方とを考ふる方便ともなりて専門の語学上には無用にあらざるべし。

### 字音仮字づかひ改良案

前に述べたるが如く字音の仮字づかひを正しくすることは學問上の必要あれども之を學ぶは漢字を學ぶよりも困難なるが上に漢字を學びたる後ならでは學ぶこと能はざるなり。我國にては漢文学を正則に講習したりし程こそ字音の発音も正しかりけめ今日となりては発音の不完全なるよりして同音異義の文字多く且つまた同一字にして漢音異音唐音の別ありて其の音を二三にすればたとひその字音の仮字づかひを正しくしたりとも之を見る者はその前後の文意用語の關係より其の本字を推測する外には専門の學者と雖もその仮字を宛てたる本字を知ること能はざるなり何となればカウと書きて字音の詞を現はす時はこの仮字に相当する漢字に香孝更講考膏の類ありまたコウと書けばこの仮字に相当する本字に功后公候口紅厚拘等の別あればなり。されば後會コウクワイと公會コウクワイと功業コウゲツと工業コウゲツとの如き或は公裁と後妻と口才と公債との別の如き或は公使と公私或は工事と公事との別の如きは到底仮字にて之を現はす能はざるなり。かくの如く同音異義の詞は雲蜘蛛橋箸端クモクモハシハシの如く大和詞の中にもありて之を區別するは前後の文意用語の關係より推測するより外に詮方なきものなれば決して憂ふるに足らずという者あれど大和詞の中にはかくの如き詞極めて少くして漢字の中には極めて多きなり。而して推測に因り字音の仮字にて書きたる詞を知ること易ければ不都合なしといふも

のあれどこは分らぬ説なり 何となれば字音の仮字を正しくせずとも大抵その本字を記憶せる程の者なれば能く其の文字を解し得ればなり また字音仮字づかひを知らざれば古書を読む時に不都合なりといふ者もあれど古書の書き方には仮字つかひを誤りたる者多くまた字音の詞を現はすには音便の仮字を用ひたるが多し 故に平安朝以来の物語日記等を読まんが為には字音仮字づかひを学ぶ必要なきなり

それ文字は思想をかきあらはす道具にして知識を運ぶ車なり 故になるべく書き易く見易きものを使とす 而して普通教育にては国民として日用欠くべからざる知識を与ふることを専一とするなり 然るに字音仮字づかひの如きは前に述べたるが如く最も有用には遠きものなり 之を学ぶもその益するところ極めて少し 然れども漢字は点画複雑にして書き難く覚えかたければ仮字は簡単にして書き易く見易きが故に字音の詞を仮字にて現はすことの必要な場合極めて多しとす かかる場合には如何なる仮字を用ふるもその心のまゝに放任して顧みざらんかその不規律なることいふまでもなからん 蝶をテフと書く者もあらんテウと書く者あらん或はチャウと書き或はチヨオと書く者もあらん其の執を用ふるとも用語の關係より推測する時は大抵その全文の意を解するには殆ど不都合なかるべしと雖も同じ漢字の音を仮字にて現はすにかくまぢくにては生徒の為に迷を起さしめ教師の為に困難を感

ぜしむるのみならず如何にも不体裁にして国語教育の不完全なることを示すものなり 教育上あに之を放棄すべけんや さて教育上便宜の為に字音仮字づかひの法を改良して簡易ならしめんには先づいかなる根拠に因りて之を定むべきか 次には如何なる方法に由りて之を實行するかを講究せざるべからず

おのれ思ふには字音の詞を仮字にて現はすには古来の習慣(音便の仮字を用ふること)に随ひ普通の発音に最も近き読みこゑの仮字にて現はすを使とす たとえば法事の正しき仮字はハフジなれども之をホウジと書き王子の正しき仮字はワウジなれども之をオウジと書くが如し この場合に法事はホオジと書き王子はオオジと書く方一層適切にして見易しといふ説もあれどこれは古来の例にもなき書き方なればおのれは先例に随てオの代りにウを用ふるを妥当なりと考ふ されどウの代りにオを用ふといふ説も字音仮字づかひ改良の一説なれば充分考究の上多数の者の便とする方に一定すべきなり 字音の仮字づかひに困る者は普通教育の生徒のみにあらずが教師たる者も困りまた漢字を講究することを専門とする漢學者といへどもこれには困却せる者多きが如し 故に簡便なる方法に一定せばその行はること蓋し疑なからん ウとオとに就いてその執を用ふるが便なるかは二三学校の生徒に諮問しても知るべし これだに一定せば更に実行の方法を講ずべ

きなり 而して茲に注意すべきは今日我が国の或る一地方のみにても現存せる正しき漢字音はそれを表準として他の誤れるものを正しくせしむべし たとへばカとクワとの別ヂとジとの別の類は勉めて其別を明らかにすべきなり

かくの如く其の根拠を定め其の表準を定むる時は容易に字音の詞を仮字書きにすることを得て漢字を学ぶ折などには便利少からざるなり

さて之を実行する方法は文部省より全国の普通教育に従事する者に訓令して教授の際にはすべてこの方法に拠らしむるか或は大臣一己の意見としてこの法によらんことを勧告せらるべし 語学に熱心なる者或は専門の学者等はその正しき仮字を用ひて新定の法に随はずとも多数は必ず便として其の法に随ふべし 而して字音仮字づかひを主張する者は或はいはん字音仮字づかひを煩はしとてこれが簡便法を定むる程なれば何故に一方に於いては大和詞の仮字づかひを正すかこれもまた簡便法に随ふべきものにあらずや これ大和詞の仮字づかひも字音のもの之を学ぶ難易の度に差別なく必要の点に異同なしと思へるより起りたる僻説なり 大和詞の仮字づかひは之を学ぶにさほど困難なきが上に歌文を読むに必要欠くべからざること漢字音の仮字づかひとは同日の論にあらざるなり たとへば「もゆるおもひ」と書くべきを今日の読みこゑの如く「もゆるおもひ」と書きては一向に興味なきのみならず何の意

なるかを解すること能はざるなり また扇をあふぎと書けばこそあふぎものなる故にしか名づけたることをも知りまたあふぎといふ動詞より転化せることをも知らるれ之をおうぎ或はおおぎなどゝ書きては何の興味もなきなり これら一二の例を見ても大和詞にはその仮名づかひを正すの必要なことを知るべきなり

以上は字音の仮字づかひに就いて問はせ給ふことどもに答へ奉り併せておのれが意見をも述べたるなり 終りに臨み普通国文の体裁を整ふることに就いていさゝか愚案を述べ御参考

に供さんとす 今日国語は日本化したる漢語の多数を含めり 故に平生吾人の使用する普通国文にはおのづから仮字と漢字とを交へ用ふるなり 之を悉く仮字書きにせんには字音の詞ありて不便少からざるなり さればとて漢字はもと仮用したるものにしてその点画多きが故に書き難く字数多きが故に覚え難し また書きたるところも漢字の多きは国文として頗る不体裁なり 然れども古来慣用したることなればその不体裁を怪しむものなくまた今日俄かに之を改むることも能はざらんそはかの仮字の会の振はざるを見ても知るべきなり さておのれは国語の独立を保たんか為め国文の体面を維持せんがため国民をして独立の精神に富ましめ一致結合の念を固くせしめんか為に普通国文の中より次第に漢字を減却して終には仮字のみを

以て文章を書かんことを望まざるを得ず 而してその国文をしてこゝに至らしめんには世人の不便を感じるが如き急遽なる改革を避け長き年月を費して漸々に改良の方便を旋らさざるを得ず この終極の目的に達せんには漸々に漢字を減却するより外に良方とてもなかるべし さては如何にして漢字を減却すべきかといふに一方に於てはなるべく漢字を用ひずとも不都合なき詞は悉く之を仮字にて書きまた他の一方に於ては仮字の綴り方に注意してその詞をなさしむることを工夫せざるべからず いま日用普通の国文中にて漢字を用ふるの必要なくまた之を用ずともさほどの不便を感じざる詞はわが国固有の詞にして助辭動詞形容詞副詞感動詞接統詞代名詞及び名詞の中なる普通名詞等なりとす これらの詞の中にて慣用上寧ろ漢字を用ふることを多少便とするものは普通名詞のみならん たとへば春夏秋冬日月雨風等の如き詞は多少の教育を受けたる者は概ね仮字よりも漢字の方を便とすべし また漢字ならでは實際の用を欠き或は特に不便を感じるものは総べての字音の詞固有名詞の類のみならん 因りておのれは漢字排斥の第一着手としてこの二種の詞の外はすべて仮字書きにするこそよけれと思ふなり 而して之を実行する順序は先づ普通教育の上に用ふる教科書及び学生の作文をしてこの規約に依らしむるを便とす かくて漸々に漢字の使用を減却する時は年月を経るに随ひ全く漢字を交へずしておのづから独

立の国文体を具備するに至らん これおのれが平生我が国文の為に希望してやまざるところなり

明治二十七年六月

高津 鋏 三郎

(五)

歴史倫理などの学科は科学として見るときと普通教育中の科目として見るときとは相違あるべき事もとより言を要せず 予は我が国語の文法に於てもまた当に然るべしと思へり されば去る明治廿五年二月発行の雑誌「文学」紙上に於て専門家の文法と普通教育上の文法とを区別すべきを述べその一節に仮字遣ひの事に論及して「漢字の音に至りては許す限りは約束を設けたし 甲州の甲<sup>カウ</sup>孝行の孝<sup>カウ</sup>皇后の后<sup>コウ</sup>因業の業<sup>コウ</sup>の類また斗<sup>トウ</sup>升<sup>ショウ</sup>の升<sup>ショウ</sup>正月の正<sup>セイ</sup>大小の小<sup>コウ</sup>妻妾の妾<sup>セウ</sup>の類みなその仮名を異にするが如きは専門の学者ならでは誰れか能くせん 専門の学者とてもなほ屢々之をあやまる事あるべし」といひし事あり 今之を敷衍して下問に答へ奉らんとす 点画の複雑なる漢字を学ぶはもと容易の業にあらず されども甲孝后業升正小妾の字音を正確に書き分くるを学ばんよりは寧ろ漢字その物を学ぶの容易にして且つ利益多きを扱ふに若かざるべし 字音を学ぶの困難なるは今さら喋々を要せざるべしといへども尚一言せん 予が大学に在りしとき字音を